

TOKYO INTERNATIONAL GALLERY

「AUN」

NANAË MITOBE × YUTO NEMOTO

2022.06.11(Sat.) – 07.23(Sat.)

AUN

Artiste: Nanae MITOBE
Artiste: Yuto NEMOTO
Galerie: Konke SHIMAMURA
Galerie: Yuto TANIMOTO
Designer: Mio ASAI
Concept: Yui TAKAGI
Crédit: Akira OTA
Photographer: Naoki TAKEHISA
Editor: Shubet TSUKISHIMA

2022 611 723

TOKYO INTERNATIONAL GALLERY
1200 1800 Closed on Sundays, Mondays and public holidays
Opening reception: 2022.6.11(Sat.) 18:00-20:00
2F TERRADA Art Complex II,
1-32-8 Higashi-Shinjuku, Shinjuku-ku, Tokyo 160-0002

Exhibition 「AUN」

Tokyo International Galleryでは、6月11日より「AUN」が始動します。

「AUN」はプレイヤーのフラットな連携を通して、「展覧会」を再考する継続型プロジェクトです。

展覧会≡エキシビションという言葉は、ex(外)とhabere(持つ)に由来し、スポーツの世界では、己が研鑽を魅せる試合をエキシビションと呼びます。ではアートエキシビションとは何なのでしょう。そのミニマムなかたちは、場に作品を現前させ、その場の外を開くことと言えます。「AUN」はこの行為を現代的に咀嚼、肉付けし、これを一つのスタンダードとして提示します。

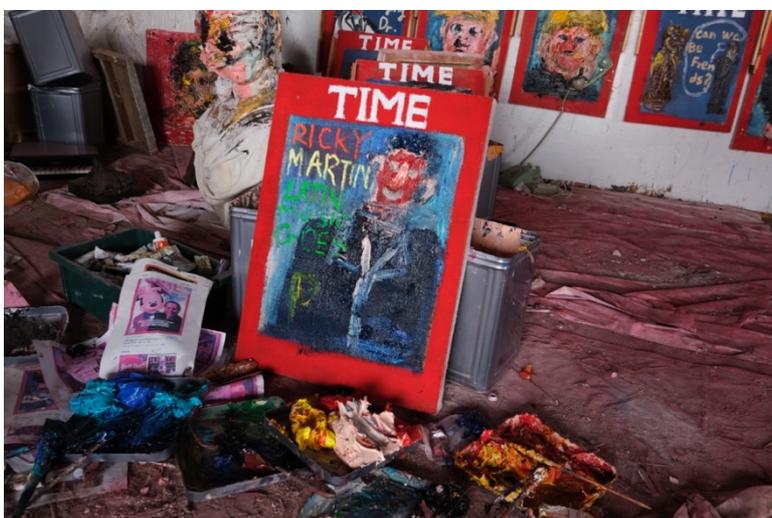
現代でも展覧会は様々なプレイヤーによって生み出されています。アーティスト、ギャラリスト、クリティック、アーキビスト、デザイナー、キュレーター、コレクター、リサーチャー、そしてオーディエンス、ここでは書き切ることできません。そして各々プレイヤーがこの繋がりに意識的であろうとなかろうと、彼/彼女たちの役割によって、展覧会は存在しています。「AUN」はこれらのプレイヤーのつながりを自覚することから始まります。

また「AUN」はTokyo International Gallery (TIG) という「場」に始まります。TIGはギャラリーであり、定期的な展覧会が開催され、作家から作品が旅立つ中継点とえます。また「ギャラリー」という言葉には、建築外部の回廊を指し示し、人が往来、循環する外に開かれた場のニュアンスが存在します。「AUN」は「ギャラリー」の場としてのもう一つの特性、つまりプレイヤーがフラットに連携する場であることを画策するのです。

「AUN」の始まりには、TIGのギャラリスト島村航介、谷本弥生の呼びかけに応えたアーティストの水戸部七絵、根本祐杜、シグニチャーデザインに浅井美緒、プロジェクトコンセプトに高木遊、プロジェクトレビューに太田光海、エディターとして月嶋修平、アーカイブの一端をたけ「AUN」は始動と共に、継続し更なるプレイヤーの連携を生みます。「AUN」は、自身の終わりが新たな「展覧会」の始まりであることを志向するのです。

「水戸部七絵 / 制作風景」

「根本祐杜 / 制作風景」



【開催概要】



2022年6月11日(土) - 7月23日(土) (※会期後も継続)

12:00-18:00 (火-土) ※日月祝閉場

TOKYO INTERNATIONAL GALLERY

〒140-0002 東京都品川区東品川1-32-8 TERRADA Art Complex II 2F

【プレイヤー】

Artist

水戸部七絵 Nanae Mitobe

画家。東京藝術大学大学院 在籍。

一斗缶に入った油絵具を豪快に手で掴み、重厚感のある厚塗りの絵画を制作する。以前からモチーフとして、著名人の人物画を描いてきたが、14年米国での滞在制作をきっかけに匿名的な顔を描く「DEPTH」シリーズを制作し、16年愛知県美術館の個展にて発表、20年同美術館にて「I am a yellow」が収蔵される。近年は、20年上野の森美術館「VOCA 奨励賞」を受賞、22年東京オペラシティ project Nにて個展を開催。また菅田将暉「ラストシーン」のCDジャケット Art coverに採用され、CASIO「G-SHOCK 2100シリーズ」PRに出演。代表作にマイケル・ジャクソンやデヴィッド・ボウイなどのポップ・アイコンをモチーフにした「STAR シリーズ」、SNSに上がる世界各国の時事の出来事を描いた「Picture Diary」等がある。

主な展覧会に、22年「war is not over」void+、「OKETA COLLECTION: THE SIRIUS」スパイラルガーデン、「project N 85 水戸部七絵 | I am not an Object」東京オペラシティ、21年「VOCA展2021」上野の森美術館、「Rock is Dead」biscuit gallery、20年「-Inside the Collector's Vault, vol.1- 解き放たれたコレクション展」WHAT、19年「I am yellow」Maki Fine Arts、2016年「APMoA, ARCH vol.18 DEPTH - Dynamite Pigment -」愛知県美術館など。

根本祐杜 Yuto Nemoto

1992年 千葉県銚子市出身。

セラミックを主な素材として彫刻作品を制作。近年では大きな人をさまざまなイメージの元、制作しておりそのイメージの発生源はドローイングや夢、日常の中で営われる思い込みや気付きにより発生する。tigでは高さ3メートル強の巨大な人を展示する。庭に掘られた人型の穴をそのまま立体にし、垂直に立たせる。そこに立つ人物は土から発掘された新人類となる。

主な展覧会に、21年「ナッシングアットオール」TokenArtCenter、20年「パーフェクトオフィス」AOYAMA STUDIO164。受賞歴：21年「群馬青年ビエンナーレ」入選、18年「CAF賞2018」最優秀賞、15年「日本大学芸術学部長賞」。

パブリックコレクション：15年「山梨県笛吹市大袋いやしの杜公園に根本祐杜先生像永久設置」。

Gallerist

島村航介 Kosuke Shimamura

ギャラリスト。東京生まれ。2012年に渡米し2016年に帰国。米国での作家・Michael Hoとの出会いにより2019年にTokyo International Galleryを設立。国内外のアートフェアに出展し2020年に現在のギャラリーを天王洲・

TERRADA ART COMPLEX IIにオープン。ギャラリー運営を通して日本のアートシーンをさらに躍進させるべく、新進気鋭の作家を中心に展示を展開している。

谷本弥生 Yayoi Tanimoto

ギャラリスト。ロンドン生まれ。オーストラリア、イギリス、アメリカへの留学を経て2019年に帰国。

日本のアートシーンをグローバルに展開することを使命とし、アーティスト個々人に寄り添う第一の理解者／サポーターとして協働。国内外のアートを媒介するパイプラインとして、アーティスト、コレクター、キュレーター等、現代美術に関わる多様なプレイヤーをニュートラルに繋ぐ。主な展覧会企画に「Have you ever seen a ghost」(2022)、「The Practice of Alchemy」(2021)、「Everything but...」(2021)、「Endless。」(2021)「H—C三N」など。(左記全てTokyo International Gallery)

Designer

浅井美緒 Mio Asai

1997年東京生まれ。東京藝術大学美術研究科デザイン専攻。個人史から社会問題を紐付け、広義的に編集を行い、視覚情報としてグラフィックを軸に表現している。クライアントワークとアートワークを横断しながら、デザイン領域に軸を置いて活動している。

Concepter

高木遊 Yuu Takagi

1994年京都生まれ。東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科修了。キュレイトリアル・スペースであるThe 5th Floor ディレクター。ホワイトキューブにとらわれない場での実践を通して、共感の場としての展覧会のあり方を模索している。主な企画展覧会として「生かれた庭 / Le Jardin Convivial」(京都, 2019)、「二羽のウサギ / Between two stools」(東京, 2020)、「Stading Ovation / 四肢の向かう先」(静岡, 2021)

Critique

太田光海 Akimi Ota

1989年東京都生まれ。映像作家・文化人類学者。神戸大学国際文化学部、パリ社会科学高等研究院 (EHESS) 人類学修士課程を経て、マンチェスター大学グラナダ映像人類学センターにて博士号を取得した。パリ時代はモロッコやパリ郊外で人類学的調査を行いながら、共同通信パリ支局でカメラマン兼記者として活動した。この時期、映画の聖地シネマテーク・フランセーズに通いつめ、シャワーのように映像を浴びる。マンチェスター大学では文化人類学とドキュメンタリー映画を掛け合わせた先端手法を学び、アマゾン熱帯雨林での1年間の調査と滞在撮影を経て、初監督作品となる『カナルタ 螺旋状の夢』を発表。また、2021年には写真と映像を用いたインスタレーションを展開した個展「Wakan / Soul Is Film」(The 5th Floor)を開催し、さらに熱海で行われた芸術祭「ATAMI ART GRANT」に参加するなど、映画に留まらない領域で表現活動を行う。

Photographer

竹久直樹 Naoki Takehisa

1995年生まれ。多摩美術大学情報デザイン学科メディア芸術コース卒、2019年よりセミトランスペアレント・デザイン所属。主にソーシャルメディア普及後における写真を扱いながら、撮影を行う。近年の主な個展に「スーサイド

シート」(デカメロン、東京、2022)、展覧会参加に「惑星ザムザ」(小高製本工業跡地、東京、2022)、「沈黙のカテゴリー」(クリエイティブセンター大阪、大阪、2021)、「エクメネ」(BLOCK HOUSE、東京、2020)など。また展覧会企画に「power/point」(アキバタマビ21、東京、2022)、「ディスディスプレイ」(CALM & PUNK GALLERY、東京、2021)などがある。

Editor

月嶋修平 Shuhei Tsukishima

作家。1990年兵庫県生まれ。京都大学総合人間学部精神分析学専攻除籍。

文章表現からアートに携わる。展示文章や出版物の構成／編集の傍ら、作家としても美術展に参加する。主な参加展覧会に『The Drowned World Anchor』(東京、2019)、『ストレンジャーによろしく』(石川、2021)、『PROJECT ATAMI』(静岡、2021)、『N貸家はいい貸家 発光する貸家と発光する音楽』(東京、2021)など。キュレイトリアル・コレクティブ「HB.」メンバー、作家集団『モノ・シャカ』の一員。

【お問い合わせ】

- ・ info@tokyointernationalgallery.co.jp
- ・ 03-6810-4997
- ・ 担当：島村